

妄点（試し読み）

筑波大文妄



目次

ミッドナイト・ブラックウォーター	ペタへるつ	5
新生活	えむばーど	9
秋空飛行	井上大和	13
ライバル	えむえむあくる	17
亡霊という名の過去	えむばーど	21
ぼっちーな、びっちーの	ペタへるつ	25
鬼畜！ ヤリマン道場・出張版	龍堂薫子	29
方舟	フミコフミオ	33

ミッドナイト・ブラックウオーター

ぺたへるつ

好きって気持ちには、忘れたつもりでいた。

午前二時。草木も眠る、秋の夜長の丑三つ時。しかし、悲しいかな世の中には夜だからといって当たり前のように眠ることのできない人間もいるわけで、たとえば僕、下宿から徒歩十分のコンビニエンスストアで夜勤を続けなければ生活していけない大学生などは、この時間、翌朝一コマ目の講義を想ってレジスターの後ろで欠伸を噛み殺すことが当たり前になっている。レジの後ろ、煙草の棚に寄りかかって、ぼんやりと店内放送に耳を傾けため息を吐き出す。客のいない店内には、暇な店員のため息と無闇に明るい店内放送だけが気怠く響いている。随分と体に馴染んだ空気だ。整然として、でも空虚。まるで魚のいない水槽を見つめているような気分になる——まあ、そんな文学的な妄想を膨らませてしまうのは、単に眠いからだと思うのだけれど。とにかく、暇で。なににつけても暇で。だから、不意に店の自動ドアが開いた時、僕はぎょっとして反射的に背筋を伸ばしてしまった。

視線は、入口へ向かう。

ふらりと入ってきたのは、ひょろりと背の高い女性。見た瞬間、心臓が止まるかと思った。呼吸を、一瞬忘れてしまう。不意打ち。これは、完全な不意打ちだ。その女性、客としては初めてだけど、僕は彼女が誰だか知っていた。間違いない。でも、知っていたのだけれど、その姿は僕の知る彼女とは少し違った。

よれよれの服を着て、髪はぼさぼさ。眼はどこか俯いていて、足取りも重い。特に目的はないのか、棚の間を行ったり来たりしている。時々立ち止まって、商品を手取るけれど、瞳はどこか虚ろで何を映しているわけでもないようだ。それは僕の記憶の中にある彼女——先輩のイメージとはややズレていた。そりゃ、もう一年以上顔を合わせていないから「他人のそら似」という可能性もなかったわけじゃない。でも、そもそも僕が先輩を見間違える筈はないし、ふと僕と目が合った瞬間の彼女の反応は、全てを確信に変えるに足るものだった。

はにかむように曖昧に微笑んで、肩を竦めて会釈して、ちよつと猫背になる。

ああ、先輩だ。

でも、僕は先輩はレジ台と二つの棚に隔てられていて、なんだか声がかげづらかった。僕も「どーも」と声には出さずに頭を下げて、レジで先輩を待つ。別に他に客はいないのだし、レジ越しにでも「先輩、お久しぶりです！」と声をかければ良かった。少なくとも僕はその程度の気安い関係であつたはずだけど、今はそれができなかった。自分でもよくわからない。

先輩も落ち着かない様子で、目が合うたびに気まずそうに肩を竦める。

しばらく、先輩は群からはぐれた魚のように店内をぐるぐる回っていたけれど、結局、カゴには何も入れないままでレジにのつそりやつてきた。やつぱり、彼女は背が高い。向かい合うと、見上げなくてはならない。

「えっと、」

先輩はわずかに首を傾げつつ、僕を見下ろしてくる。

「ごめん。なんか、ない？」

意表をつかれた。

とろんと疲れた表情で、ずいぶんと無茶なことを言う。だけれど、その感じはとても懐かしくて、

「なにかって、なんです？」

僕も合わせて応える。

「なんでもいいんだけど」「なんでもって言われても」「じゃあ、店員さんのオススメで」「いやここ、コンビニですか」「うそ、不便だよ」「先輩の日本語がね」「言つたな。指導教員にも言われてばかりなのに」「それは御愁傷様です」「いえいえ、気にしてませんから」「いや、そこは気にしろよ」

眼を合わせて、沈黙。そして、どちらからともなく失笑。

「……やつぱり、後輩君だったね」「やつぱり、って。確信なかったんですか」「だって、コンビニの制服着てるし、一年ぶりだし」「違つたらどうするつもりだったんです？」「さあ、違わなかったしね」「まさか、このコントじみたセリフを考えるためにぐるぐる歩き回つてたんですか。あんな物憂げに」「……だったら、どうする？」「いや、相変わらずだなあつて」

一年——その時間的な距離は、いつの間になくなつていた。

僕と先輩の間には、いまや空っぽの買い物かごがあるだけだ。

「久しぶり。元気してた？」

ひどく不思議な感覚に陥る。失くして、諦めていた日記帳が不意に手元に現れたような歓びと、戸惑い。

「まあ、ぼちぼち。先輩は、調子どうです？」

先輩は、すぐに答えなかった。

「ま、なんとか、ね」

その表情に、微かな影が差す。

「忙しいんですか？」「うん、まあ、4年生の秋だしね」

「あ、卒論」「うん」「お疲れ様です」「うん、後輩君も」

自分の頬が火照ってくるのがわかる。

「じゃあ、お会計、お願い」

空っぽの買い物かごを間に挟んで、向かい合う。

久しぶりに会った先輩は、一年前より少し痩せていた。

(続く)

新生活

えむぼーど

ドアを開けたら、君が居た。

君は攻撃的な目つきで僕を睨めつけ、けれどへたり座り込んで僕を見上げる。君の陶磁のような肌からは、水が滴り落ちてフローリングの上に水溜まりを作る。ひたり、ひたりという音が、静かな部屋の中、無駄に大きく響いて聞こえる。

君が睨んで僕が見返す。そんな不思議な均衡状態を破つたのは君のくしゃみ。

「くちゅんっ」

「……風邪、引くよ？」

可愛らしいそのくしゃみに、僕は思わず笑って声を掛ける。君は再び僕に強い視線を送る。気のせいかな、少し恥ずかしそうに頬を赤らめている。

※※※

風呂を沸かして彼女を入れる。彼女は酷く風呂に入るのをいやがったが、震えるその様子は力なく、僕が押し切ると嫌々服を脱ぎ始めた。その場で脱ぎ始めるものだ

から、僕は慌てて居室に戻り、彼女が風呂場に入ったところで、彼女の服を洗濯乾燥機に放り込んだ。

ミルクを暖める。電子レンジではなく、小さな手持ち鍋のようなミルクパンで温めるのが、僕のこだわり。ミルクを少し垂らして、弱火で温める。同時にお湯を温めてその中にコップを浸しておく。シンプルな料理は、ちょっとした気遣いが効果的だ。

「そういえば、この家に人をあげたのは、初めてだな」

台所から、部屋を見渡す。キッチンから部屋を一望でき、この物件を選んだのは、誰かとしやべりながら食事を作るから。広くて新しく、少々お高い。部屋の中にはまだ開けられていない段ボールが一箱、二箱。家具はまだ足りていない。

「空っぽだな」

つい、そんな言葉が出た。

コップをお湯から引き上げ、タオルでぬぐっていると、ガチャリ部屋のドアが開いた。少々やせぎすな身体にバスタオルを巻き付け、立っている。やっぱり僕を睨んで

いる。

「うーん……こつちに越してきたばかりだし、誰かに恨みを買った記憶、何にも無いんだけど……」

ポリポリと頭を掻いていると、彼女はぶいと視線をずらし、ソファに向かいすんと座る。勝手知つたる人の家のように。我が物顔である。

ミルクを注いで彼女の前に置く。ふわり牛乳のにおいと、遅れて蜂蜜のにおい。我が家の冬の定番だ。彼女は無表情にじいとコップを見つめ、顔を近づけ、すんすんとおいを嗅ぐ。ちらり、彼女は伺うように僕をみて、僕が笑顔で頷くと、コップを手にとつてちろり舐める。「あちつ」と小さな声をあげてふるふると顔を振る。僕が思わずくすくすと笑うと、君は恨めしげにまた僕を睨む。

(続く)

秋空飛行

井上大和

今日もまた、一日の授業が終わり、既に閑散とした校内にチャイムが虚しく響き渡ります。たとえ誰もいない部屋であつても、この音は差別などすることなく、学校の隅々まで、まるで真空を埋め尽くすかのように染み込んでゆきます。それは、この私の、少しさみしくて、何だか隙間が空いてしまった心にも言えることなのでしょう。秋も終わりに近づき、この時刻になるともう辺りは暗くなつてしまします。私は、退屈な授業が終わった開放感を嘸み締め、この空を眺めます。赤とも青ともつかない不思議な色が、辺りを染めています。この色を見る度に、私は、ここが本当に現実なのかと、少し不安になります。でも何度考えたところで、ここが現実なのか、そうでないのかを見極めることなど、私にはできません。たとえわからなくなつて、特別私に変なことをするわけではないのですから、問題はないのです。もしここが夢でも、異世界でも、私はただ今まで周りの人々と与えられ、刷り込まれてきた常識というものに、従うだけです。

校舎の裏には自販機があります。私はいつも、授業が終わるとそこでジュースを買つて、その横にあるベンチでジュースを飲みます。今日はどのジュースを飲もうか、それが、学校での私に与えられたさやかな自由です。授業も、先生も、クラスメイトも、選ぶことなんてできません。厳密に言うとは、誰と友達になるのか、選択授業で何を選ぶのかなど、選択をせまられる場面は多くあります。しかし、そのどれもが結局は、自分との相性や、周りの状況などによつて、ほぼ一意に決まつてしまうのです。たとえば、わざと制服を着崩して、周りの目を気にせず、に喚ぎ立てるような人とは、私は付き合いません。周りの人の期待を背負っている私が、わがままで自堕落な人間と深く交流することは、あつてはならないのです。そのように、周囲の状況を考へて、一番良いと思われるものを選択していくことで、私たちに与えられているように見える自由というものは、たちどころになくなつてしまいます。でも、ここに私を縛るものはありません。私がどのジュースを選んだのかなどを知る人はいませんし、その選択が周囲に与える影響も、ないと言つてよいほど

軽微です。この瞬間私に与えられるのは、限りなく本当の自由に近いものといえるでしょう。だから私は、放課後のこの時間がとても好きで、ずっとこんな時間が続けばいいのに、とさえ思います。

今日私が選んだのは、普段はあまり飲むことのないジュースです。赤紫色をした缶は、さつき見た空の色のようで、どこか現実味のない感じがしました。もしかしたら、このジュースを選んだのは、そんな空の色に惹かれたからなのかもしれません。ベンチに座り缶を開けると、炭酸ガスと一緒に缶の中の香りが広がります。これもまた、なんだか不思議な香りです。口に含むと、とても甘くて、私は少し幸せになります。小さい頃から、甘いジュースを飲もうとすると、よく親に叱られたものです。いつしか私は、家でジュースを飲むことはなくなりました。でも本当は、甘い甘い炭酸飲料が、私は好きなのです。ふた口ほど飲んだところで、ふと、こちらに向かって、足音が近付いていることに気が付きました。

(続く)

ライバル
えむえむある

ここに書かれた話は、全てはフィクションです。

「Facebookみたか？ お前のライバル、婚約したぞ（笑）」
高校時代の親友からメールがきた。高校入学から早十年、卒業から数年。数年ぶりのメールにしては、素っ気ない本文だった。よほど早く知らせたいことでもあったのか。

PCを開くと、確かに高校時代の「ライバル」が婚約したと報告していた。ライバル、その名は小澤君。僕は彼を、意地悪の対象としてみたことはあっても、ライバルとは思ったことはない。だが、僕らの周りは、みな僕らをライバル関係と観ていた。

ただの一度も勝負になっていないのに。

小澤君を語る上で欠かせない人物がいる。石戸由依だ。石戸由依と僕は、中学時代の同級生だ。中学二年の春、僕が転校した先で出会った。

当時の僕は反抗期真っ盛りで、転入早々、周囲との衝突をしていて、石戸由依とのファースト・コンタクトは記憶していない。たしか、二期席替えて籍が斜め後ろくらいになってから急に仲良くなった記憶がある。以降、給食の班、総合的な学習の班活動、修学旅行の班までずっと一緒だった。学校にいる間ずっとつるむ仲間になっていた。

石戸由依とは、妙な縁がある。中学三年の夏、オーストラリアにホームステイに行く募集がかかった。市の予算のおかげで、タダで行けるのに毎年定員割れ。べ切直前まで、ウチの中学校からは俺しか応募していなかった。それが、学年主任の教師が「ホームステイは自己推薦に使える」と言い出してから応募者が現れた。石戸由依くじ引きが行われることになり、俺はハズレを引いた。

オーストラリアから帰ってきてすぐの石戸由依からメールがきた。遠くの市の高校の見学に行こうというのだ。その頃、石戸も僕も受験後の引越しが決まっていた。ちようどその引越し先の近くの高校から、部活推薦で声

がかかったとから見学に行きたいというのだ。断ると、

「あんな遠くまで女の子一人で行かせる気？」

と女を武器にしたメールをしてきた。それに続き、石戸をよく面倒みている学年主任から電話までかかつて、結局の俺も説明会に一緒にいくことになった。偏差値が十以上下の高校へ。

八月末のまだ暑い日だったと記憶している。駅で落ち合うと、石戸はいつも以上に浮ついていた。駅裏のコンビニでジュースを買い、改札を抜けてプラットフォームで電車を待つ。その間、ずっと石戸はニヤニヤとしている。

「さつきからそれ、何？ 何かいいことあった？」

しびれを切らして訊くと石戸は待つてましたという顔をした。

「森岡、森岡、あのね、これ、秘密ね」

屈託のない笑顔で、ちょいちょい手招きする。僕が少し屈むと、耳元で打ち明けられた。

(続く)

亡霊という名の過去

えむぼーど

後悔という言葉が、僕は嫌いだ。過去を悔いることは、今の自分を否定することだ。今の自分が「できた人間」だなんて露ほども思わないけれど、友人には驚くほど恵まれた。そんな友人たちを得ることができたここまでの選択を、僕は否定しない。「後悔」なんていう言葉で、踏みじりたくはない。

引越しの作業をほぼ終えて、部屋を見渡した。六畳一間の安アパート。三・一で抜けてしまった床は、その上に立つとぐずりと沈み込む。押し入れを開ければ、ぽっかりと空いた天井の穴から、かび臭い空気が流れ込む。そんな部屋とも今日で、お別れだ。

安くはない学費を払って大学院に進み、二年間の大学生活延長線。研究室でやることと言えば、モニタを見つめてキーボードを叩くことだった。率直に言って、正気ではない。順番に皆、病んでいった。日を重ねるにつれ、大切なものがハラハラと剥がれ落ちてゆく。僕たちの日常は、あまりにも脆い。

「寂しさは人を殺すってこと。実感を伴って知ることが

できた。それだけで、大学院で学んだこととしては、十分すぎるよ」そういつて友人は、自嘲気味に笑う。

研究に行き詰まると、車に乗り込みイグニッション・キーを回した。時代遅れの愛車は、耳障りな抗議の声をあげたのち、面倒そうに呻いて始動する。僕はしばらくエンジンを暖め機嫌をとったのち、出発をする。目的地も、決めずに。

人はその話を聞くと、「暇なんだね」といった言葉を投げてよこす。「そんな無目的で非生産的なことに従事して君は一体何がしたいんだい？」と、あきれ顔で僕を見る。未来を予測し、目的を設定する。到達可能な目標を立てる。大層立派なことで僕は反吐が出る。

目的地を決めないドライブは、人生そのもののものだ。予想できない場所に、予想のできないルートを通ってたどり着く。大半が平々凡々とした景色。時折目を見張る光景。住宅街から、星の海まで。同じ月極三千円の駐車場から辿ることができる。そう、僕たちはどこへだって行ける。予測できる結末なんて糞食らえだ。

友人を乗せて走ることもあつた。研究に追われる友人、恋を煩つて心を壊した友人、大学院に更に残ると決めた友人——様々だ。恋の話もすれば、自分の専門分野の話もする。隣の家の喘ぎ声がうるさいと愚痴ることもあれば、行き詰まつた研究の相談もする。一年間で、三万キロ、地球一周には届かない程度の距離。そんなくだらない大切なドライブを僕は続けた。

「ドライブに、行こう」

そう言ったのは僕だったのか、君だったのか。まるでもやが掛かつたように思い出せない。けれど、君の笑顔だけは僕の記憶に鮮やかに残されている。同じ研究室に居た君は、うずたかく積まれた論文を見上げて、ただため息をつくばかりで進捗は無かつた。澁刺とした優等生であつたはずの君が、何故そのようになったのか僕も不思議であつたし、指導教員も困惑していた。けれど僕は驚かなかつた。君も大学の重力に捕らわれてしまつただと思つた。

本当に驚くべきことは、僕が君と一緒にドライブに出

かけていた、その事実だ。お世辞にも良い造形とは言えない顔を持つ僕が、学内でも噂の君と一緒にいる。それも、狭い空間の中に、短くはない時間を共に。

(続く)

ぼ
っ
ちーな、び
っ
ちーの
ぺ
たへるっ

「0」

「ぼっち」と「びっち」はなんだか似てる。

それが二人の出逢った理由というならば、この世界は思いの外に駄洒落でいて、なんとも素敵に間抜けている。だから、私はもう少しだけ、この世界を好きでいようと思えるのだ。

ほんの一瞬だけけど、ぼっちな私とびっちな彼が重なり合うことのできた世界なのだから――

「1」

気怠く停滞した空気の色を変えるのは、昼放課を告げる鐘の音だ。起立、礼、ありがとうございました。教師が退室すれば、教室という溜め池から賑々しい喧騒が堰を切ったように溢れ出す。それは青春という名の若さの奔流。そこで流れに遊べる者は良し。気の合う仲間を見つけて楽しめばいい。ただ、水の合わない魚にとつては毒水に放り込まれたかの苦痛でしかなく、つまり、私のような人間にとつては昼放課なんて息苦しいだけのしんどい時間ではない。なんでわざわざ集まってご飯を食べるの？　なんでいちいちお喋りしてるの？　一人じや

ダメなの？　死ぬの？　私ぼっちだから、よくわかんない。

そう、私はぼっち。

ただの、ぼっち。

周りには大人しくて無口だと思われているかもしれないけれど、本当は喋る相手がいないだけ。

そんな私の天敵は、華やかで明るい普通の女子たち。馬鹿で元気な普通の男子たち。つまり、全員。

世界の全ては他人で敵だ。

授業中はみんな別々の孤独なふりをしているくせに、休み時間になった途端に本性を現す。まるで磁石だ。びたりびたりとくつついて、二人三人四人五人。一人ぼっちは誰もいない。たぶん、私だけ磁性が違う。違うから、休み時間の教室の中には留まらない。

留まらないから、出て行く。

だから今日とていつも通りに、私はさも用事がある素振りで弁当片手に教室を抜け出した。

向かう先は決まっていた。ひとけのない図書館の屋上。他の誰にも出会すことのない最後の楽園――だったのに、

この日は何故か先客がいた。それも、私の天敵が五人。可愛い女子が三人、男子が二人。なにそれ合コンのつもり。学生の分際で楽しそうに仲良さそうにしゃがって。なんて穢らわしいんだろ。私の場所が汚された。

呪詛を込めて睨む。憎しみで人を殺せたらと思う。そしてたら念が通じたのか気づかれそうになつたので、私は楽園をやむなく放棄した。そして、辿り着いたのが、冬場は使われないプールの裏手だつた。

びっちは、そこにいた。

(続く)

鬼畜！

ヤリマン道場・出張版

龍堂薰子

おかわりは断らない

殿方と逢引きをしたんだけど、例によって例の如く泥酔してまして、全然家に帰りつけないわけです。反対方向の電車に乗ったり目的の駅で降りられなかったり、完全にボンコツ。

そうしたら迷子の迷子の龍堂さんの前に紳士が現れて、送ってあげるよと言われた。もう私ほつとけない女だからさあ。

じゃあ帰る前に駅のトイレ行くて言ったらトイレの前で待つてくれて、あーこの人私のことどつかに連れ込もうとしてるウ！ っと思つたんだけど、いかんせん気持ち悪くてね。吐きました。我慢じゃないけど、私吐くの得意なのよ。最初だけ咽に指を突っ込んで勢いが付いたらあとは腹筋の力だけで吐ける。

吐いた後に手を洗って鏡を見たら、付けてたはずのペンダントがナイ。安物なら別に失くしてもいいんだけど、これ自分でデザイン書いてオーダーメイドした一点物の

ペンダント！（これは自慢です）

多分ホテルを出る時に着けるの忘れた。翌日にでも電話して取りに行けばいいんだけど、もう完全に脳がキマッてるから判断力ないの。今すぐ取り戻したい！ 愛を取り戻せ！ つつてね、戻りました。紳士を置いて家と反対方向の電車に乗った。確実に帰りの終電なくなる時間だったんだけど、また来るの面倒だし。

ホテルに戻ったらちゃんとして置いてくれたので、無事回収。よかつたよかつた。でもね、帰りの電車ないの。タクシー使うにはちよつと遠すぎるし。またこのホテルに泊まる……？ まぬけじゃない？

とりあえず駅まで戻ると改札が閉まつた。電車がないとするとビジネスホテルか漫画喫茶か、それともひとりで朝まで飲むか？ と考えてたら、20代前半くらいのチャラ男につかまりました。不思議なんだけど皆さま、よくこういうだらしなく酔った女をどうにかしようと思えますよね。それとも酔ってるからこそ？

しかしとりあえず若い。顔に「クズです」って書いてあるけど、若いことは若い。それに私もクズだから問題ナ

シ！ 私キミの二〇歳は上なんすけどいいんすかね、と言ったんだけど話が早いっつか色々端折りすぎだらうていうか、会って一分でホテルに行こうと提案されたので、ああ、これえで行き先が決まったね、よかったね、と宿泊目当てでついて行くことにしました。男も男だけど私も私だよ。

そしたらヤリますね、とりあえず。さっきヤッたばかりなのにまだヤルよ。

うん、まあヤったのはいいんだけど、連絡先教えてとしつこい。私は基本的に行きずりの人と２度目はないので、連絡先聞かれたら困る。そういうのはー、またセックスしたいと思わせてからー言って下さいねー？

その子は友達の家に行く途中だったとかで、結局泊まらずに帰って行った。私は知らない人がいるとおちおち熟睡できないから、ひとりで悠々と泊まれてよかったです。

（続く）

方舟

フミコフミオ

老人は、子供の頃草むらで見つけたカマキリの卵を思い出している。

カマキリの卵は、当時暮らしていた住宅地の外れにある滑り台と砂場だけの可愛らしい公園の隅の草むらに生えていた、葉の少ない枯れた草の、ちょうど子供の膝小僧の高さに、陰囊のような形をしてあった。

しばらく、観察を続けていると、そこから小さなカマキリの子供が、何百、いや、何千という数のカマキリの子供たちが這い出てきた。

それは、平和な頃、満員の電車からホームへ吐き出されるように出てくる沢山のサラリーマンたちの姿を幼い老人に想わせた。

まだ小学校に通い始めたばかりだった老人は手に持っていたライターに火を点け、玩具のような炎が目の高さになるまで腕をあげた。

炎を透かして世界が見えた。草むら。カマキリの子供。滑り台。砂場。その向こうに広がる一戸建ての屋根の連なり。公共団地。スパーマーケット。アドバルーン。

鉄道。高速度路…ありとあらゆるものが炎の向こうで揺れていたのを老人は思い出ししている。

神との戦争は終わろうとしていた。

老人の目は今に戻ってきている。

戦争。

人間にとつては種の滅亡をかけた最終戦争だったはずだ。しかし神にとつては…？

「子供同士の喧嘩程度にしか考えてないだろう…」190センチ、小山のような体を丸めるようにして老人はタバコの火を灰皿で押し潰すようにして消し、自嘲気味に呟いた。

口には出せないが、それが大方の認識である。この認識は人間だけのものだ。神は人間を戦う相手とは認識していない。

戦いは一方的すぎたのだ。

それはもはや戦いといえるレベルではなかった。

「殺戮」

殺戮には殺すという意味があるが神には殺しているという認識すらなかっただろう。

それでも人間はその殺戮を「戦争」と呼んだ。それは人間のうちばけな自尊心のあらわれだったのだろう。《抵抗もせずに滅びるわけにはならない》《一矢も報いずに滅びるなど認められない》

神にも誤算はあった。圧倒的な神でさえ、人間の自尊心を完全に制圧することはできなかった。もつとも制圧する意思があったのか疑わしいところではあるが。

老人は準備にかかる。老人が住んでいる街に人の姿を認めるのは難しくなっていた。

最盛期には30万超の人間が暮らした神奈川県平塚市。公式には人口は10分の1程度にまで激減したらしい。もつとも老人はその数字を信じていない。

「集計する役人がいねえのに」

老人は駅前のスーパーに入り食料と酒や清涼飲料水を物色する。略奪にはあたらない。老人の他に人間は誰もいない。老人は戦利品を車に積むと、南北に走る国道に

車を走らせた。カーラジオを入れる。

「オッケー。今日最初にお届けしたのは『潮騒のメモリー』でした。DJヨシクニです。今週は神の攻撃が落ち着いていたけど皆さんいかがお過ごしかなあ。メールをご紹介する前に大事なお知らせをしておくよう。とてもジューヨーな、お知らせだあ。『方舟第三番艦』乗船資格をお持ちの方は明日の指定時間に乗船場所に荷物を持ってきてほしい。指定時間は資格票に記載してあるQRコードを読み取ってくれい。繰り返し、『方舟第三番艦』乗船資格をお持ちの方はあ……」

「くだらん……」老人はカーラジオをきつて呟いた。老人には乗船資格がなかった。

(続く)

妄 点 vol.5

発行日	2013 年 11 月 4 日 第一刷発行
頒 価	50 円
編 集	筑波大文妄
発行所	太陽村第二収容所
公式サイト	http://www.bunmow.net
連絡先	bunmow@hogefuga.net
